平安朝の人麻呂像形成

How to create the image of Hitomaro in Heian Age

吉村　誠

Makoto Yoshimura

(Received September 26, 2008)

一　はじめに

万葉集の歌人である柿本人麻呂は、平安朝においても高く評価されているが、代表的な作歌も含めて、現在の万葉集研究における実態認識とはかなりかけ離れた所でとらえられている。古今集仮名序に記載されている「おほき三つの位」である正三位という官位は、万葉集はもちろんのこと、日本書紀においても見出すことが出来ず、実態とは異なった官位がどこから生まれた観念であるか疑問視されてきたし、代表作とされる「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」という歌は、万葉集では見出すことが出来ない。

これらのことは、平安朝に作られた独自の人麻呂像によるとされてきているが、その形成の実態は不明瞭である。

そこで、本稿では古今集仮名序における「おほきみつの位」という記載理由と、人麻呂代表作の形成過程の二点について再考してみたい。

二　古今集仮名序の記載

いにしへより、かくつたはるうちにも、ならの御時（文武天皇）よりぞ、ひろまりにける。かのおほむ世や、哥のこゝろをしろしめしたりけむ。かのおほん時に、おほきみつのくらゐ、かきのもとの人まろなむ、哥のひじりなりける。これは、きみもひとも、身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ、たつた河にながるゝもみぢをば、みかどのおほんめには、にしきと見たまひ、春のあした、よしのの山のさくらは、人まろが心には、雲かとのみなむおぼえける。又、山の邊のあか人といふ人ありけり。哥にあやしく、たへなりけり。人丸は赤人がかみにたゝむ事かたく、あかひとは人まろがしもにたゝむことかたくなむありける。

ならのみかどの御うた、龍田川もみぢみだれてながるめりわたらばにしき中やたえなん。人麿、むめの花それとも見えずひさかたのあまぎるゆきのなべてふれれば。ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく舟をしぞおもふ。赤人、春の野にすみれつみにとこし我ぞのをなつかしみひとよねにける。わかのうらにしほみちくればかたをなみあし辺をさしてたづなきわたる。

この人々ををきて、又すぐれたる人も、くれ竹の世々にきこえ、かたいとの、よりよりにたえずぞありける。これよりさきの哥をあつめてなむ、万葉

集と、なづけられたりける。（「古今集」仮名序）

古今集仮名序の一部である。周知のことであるが、序文では人麻呂は正三位の位を示す「おほきみつのくらゐ」と冠せられている。もちろん先ほども述べたようにこの官位は万葉集では見られず、まして日本書紀には人麻呂の名前さえ記述がない。このことにより序文執筆時において万葉時代の実態が不明になっていると考えることは容易であるが、一方で正三位という高位を人麻呂に冠することに当時としても疑問を感じなかったかどうかについて考えてみなければならない。しかしこれは歴史的認識というよりも仮名序の文脈において冠せられているように思われる。

古今集仮名序は、和歌の由来を述べることに中心があり、詩の六義にならった和歌六体や六歌仙を説明し、和歌のあり方を解説している。このことは古くから指摘があるように文選の序文と構成が類似していると言える。文選の序文は、詩の六義に始まり、詩文の由来を論じることに中心を占めている。そして天子の功績を述べ、民衆も天子を讃美し天も瑞祥した君臣和楽の世の中を称え、「言語侍従の臣」として「司馬相如」以下詩文にすぐれた数多くの文人の名前を紹介している。

古今集仮名序も、文選序文と同様の文脈で見なければならない。「これは、きみもひとも、身をあはせたりといふなるべし。」とあり、君臣和楽の思想で描かれているからである。

とすると、「言語侍従の臣」として人麻呂と赤人が対応しているということになる。

文選において「言語侍従の臣」として掲げられている人は、宰相であったり高官であり、いわゆる士大夫層に属する人々である。そしてこれらの人々が天子と関わる中で功績を称えた形になっている。文選序文に示された人物について略述すると、司馬相如は前漢時代の辞賦作家の第一人者としての評価を受けており、前漢の景帝、梁の孝王、武帝と仕えた人である。また虞丘寿王、東方朔、枚皐もそれぞれ前漢の武帝に仕え、すぐれた詩文を作ったことで有名である。また王褒は、梁の武帝に仕えて文才を認められており、劉向も漢の宣帝や成帝に仕えて、文章に巧みであったと伝えられている。これらの人々は時の皇帝に詩文が高く評価されて高官に任じられた経歴があり、そうした意味で「言語侍従の臣」として文選序文に掲げられているものである。一方、御史大夫倪寛、太常孔蔵、太中大夫董仲舒、宗正劉徳、太子太傅蕭望之といった「公卿大臣」として掲げられている人々は、董仲舒のように儒学者であったり、学問で身を立てた人々である。従って詩文の評価というよりも、儒教的な徳が評価されて文学と関わった人という意味で序文に掲げられたと言える。

古今集には、この公卿大臣に対応する人物は掲げられていない。ここに政治と文学との関連性を重視する中国的な観点と、政治から切り離して考える日本の文学観との相違が認められるが、序文は人麻呂や赤人を「言語侍従の臣」という見方から取り上げていることには違いないであろう。

ただ、万葉集に掲載される多くの歌の作者の中で、何故人麻呂と赤人の二名だけがとりわけ掲げられているのかに疑問が残る。しかし古今集の編纂から十五年ほどさかのぼる「寛平御時后宮歌合」には人麻呂、赤人の歌を踏まえたものと思われる歌があり、両者はすでに評価されていたと思われる。

春の野に若菜つまむとこし我を散かふ花に道はまとひぬ（春歌二十番右）

まきもくのひはらの霞たちかへりみれ共花のおとろかれつつ（春歌二十番左）

前者は山辺赤人の

春の野にすみれ摘みにと来し我れぞ野をなつかしみ一夜寝にける（万葉集巻八・一四二四）

を本歌にしていると思われるものである。そしてこの赤人歌は平安朝においてかなり評価されていたことは古今集仮名序の古註にも掲げられており、また平安朝を通じて多く歌集に見ることが出来る。

後者については、「巻向の檜原」という地名で万葉集には次の二首が掲げられる。

巻向の桧原に立てる春霞おほにし思はばなづみ来めやも（巻一〇・一八一三）

巻向の桧原もいまだ雲居ねば小松が末ゆ沫雪流る（同・二三一四）

いずれも人麻呂歌集所出歌である。春の歌であるので前者を踏まえた可能性は高い。人麻呂歌集歌ではあるが、他に巻向の地名は人麻呂歌集所出という形で万葉集には掲載されており、人麻呂の妻が居住していた場所であると考えられている。歌合の歌は歌枕的に詠まれているもので人麻呂歌の地名を踏まえていることは十分にうかがわれる。

このように見ると、古今集撰進直前の歌合において、人麻呂、赤人の歌を意識したものがあり、万葉集の歌人の中でも人麻呂と赤人が取り上げられる要素は十分存在したと判断してよい。

ただし前代では人麻呂や赤人だけではないという認識は序文の次の段からも知ることが出来る。

この人々をおきて、又すぐれたる人も、くれ竹の世々にきこえ、かたいとの、よりよりにたえずぞありける。これよりさきの哥をあつめてなむ、万葉集と、なづけられたりける。

しかし古今集序文は、文選の「言語侍従の臣」という視点から人麻呂と赤人をとりあげたのであろう。さらに君臣和楽思想が重なっている。

万葉集における人麻呂の歌は、吉野離宮讃歌を始めとして、皇子献呈歌など宮廷を中心とした歌がある。また赤人も吉野離宮での歌や行幸従駕歌がある。そうしたことが古今集序文筆者にとって、天皇に近似して君臣ともに歌を詠み合った理想的な形を造形したのであろう。

次に続く文章は、天皇と人麻呂を対句にしてそのことを具体的に描いている。

秋のゆふべ、たつた河にながるゝもみぢをば、みかどのおほんめには、にしきと見たまひ、春のあした、よしのの山のさくらは、人まろが心には、雲かとのみなむおぼえける。

両者とも万葉集には該当する歌がない。後人の書き込みと思われるこの直後の割り注には古今集二八三番歌を掲げることが出来るが、この歌は本文中では「よみ人しらず」であり、左注に「或人のいふ」として平城の帝が掲げられている。また同じ古注が引用する人麻呂の歌は吉野ではない。岩波新古典大系『古今集』の脚注が、「元明天皇にとって特別な意味のある天武・持統朝の竜田と吉野離宮を連想」してのことであると述べているように、そのことを踏まえた修辞的な体裁で説明されているものと思われる。

また真名序にも「柿本大夫」と名前が掲げられており、五位の総称として「大夫」が付けられているが、真名序も文選序文と文章構成が似ており、文選引用の詩人の称にならったと考えられる。仮名序と真名序での官位の相違は、後世ほど厳密な形で官位を認識して

いないことを示している。中国文人の士大夫の身分と同様な形で人麻呂を形容しようとしたということが本質であろう。

また「山辺赤人」については、人麻呂と同列の評価を行いながら尊称が付けられていないことは不明であるが、万葉集において赤人には人麻呂と異なって明確な献呈歌が見られないことから「天皇に近侍」したと見なされていないからであると考えることが出来る。

このように見ると、古今集序文においては、文選の文脈にならって人麻呂は天皇に近侍したと見なし、君臣和楽を描く目的で掲げられ、そのために高官である位が付けられたものと解釈され、伝承過程で三位になったというよりも古今集序文の筆者によって修辞的に付けられたものとして理解した方がよいように思われる。

三　人麻呂代表作の形成

次に古今著聞集に人麻呂影供の初出と言われるものが記載されている。少し長くなるがその部分を引用する。

「修理大夫顕季人丸影供を行ふ事」　古今著聞集　一七八話

元永元年六月十六日、修理大夫顕季卿、六条東洞院亭にて、柿下大夫人丸供をおこなひけり。件の人丸の影兼房朝臣夢本あたらしく図絵する也。左の手に紙をとり、右の手に筆を握て、とし六旬ばかりの人なり。其うへに讃を書。

柿下朝臣人麻呂画讃一首并序

大夫姓柿下　名人麻呂　蓋上世之歌人也。仕持統・文武之聖朝、遇新田・高市之皇子　吉野山之春風　従仙駕而献寿、明石浦之秋霧　思扁舟而瀝詞　誠是六義之秀逸、万代之美談者歟　方今依重幽玄之古篇、聊伝後素之新様、因有所感乃作讃焉　其詞

和歌之仙　受性于天　其才卓爾　其鋒森然

三十一字　詞華露鮮　四百余歳　来葉風伝

斯道宗匠　我朝前賢　温而無滓　鑽之弥堅

鳳毛少景　麟角猶専　既謂独歩　誰敢此肩

ほの〳〵とあかしの浦の朝霧にしまかくれゆく舟をしぞ思

此讃　兼日に敦光朝臣つくりて、前兵衛佐顕仲朝臣清書しけり。当日影の前に机をたて、、飯一杯・菓子・やう〳〵の魚鳥等をすへたり。但物にてつくりて実物にはあらず。前木工頭俊頼朝臣・加賀守顕輔朝臣・前兵衛佐顕仲朝臣・大学頭敦光朝臣・少納言宗兼・前和泉守道経・安芸守為忠等也。次饗膳をすゆ。次柿下初献、侍人等鸚鵡の盃・小銚子をもちて簀子敷に候ひけり。亭主顕季卿申されけるは、「初献は和歌の宗匠つとめらるべし」。満座一同しければ、俊頼朝臣座を立て影の前にすゝむ。顕輔盃をとりて人丸の前にをく。道経小銚子をとりて、盃に入て机の上にをく。各座にかへありつきて勧盃あり。二献の程に、式部少輔行盛来くはゝる。右中将雅定朝臣又来られけり。亭主のいはく「先人丸の讃を講ずべき也」、人〳〵所存不同。亭主猶讃を前に講ずべきよし申されければ、机の前に文台を置て円座をしく。件讃、白唐紙に書たり。右兵衛督又来らる。讃をひらきて文台にをきて、これを講ぜらる。次和歌を講ず。題云、「水風晩来」　敦光朝臣序をかきけり、講じをはる程に、敦光朝臣朗詠をいたす、「新豊酒色云々」　次亭主同句を出す。又詠吟せられて云「保能々々と明石浦之朝霧に」　次敦光朝臣詠吟していはく、「多能免つつ不来夜数多尓」衆人興に入て、おの〳〵後会を約しけり。（後略）

元永元年（一一一八）は、白河上皇と鳥羽天皇の時代で平安朝も後期になってのものである。ここで問題なのは、この中で顕彰される歌である。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ

この歌は平安朝以降人麻呂の代表的な歌とされるが、万葉集にはない。しかも古今集では羇旅歌（四四九番歌）に入れられて「よみ人知らず」と詞書きにあり、左注に「この歌は、ある人の曰く、柿本人麿が歌なり」と注記されている。また古今集仮名序の古註には人麻呂の歌として引用されているものである。そしてこの「明石」の歌は、今昔物語に以下のような説話として出ている。

今ハ昔、小野篁ト云フ人有リケリ。事有リテ隠岐ノ国ニ流サレケル時、船ニ乗リテ出デ立ツトテ、京ニ知リタル人ノモトニ、カク読ミテ遣リケル、

ワタノハラヤソシマカケテコギ出デヌトヒトニハツゲヨ
アマノツリブネ

ト。明石ト云フ所ニ行キテ、其ノ夜宿リシテ、九月バカリノ事也ケレバ、アケボノニ寝ネラレデ、ナガメ居タルニ、船ノ行クガ、嶋隠レスルヲ見テ、哀レト思ヒテ、カクナム読ミケル、

ホノ〳〵トアカシノ浦ノアサギリニ嶋カクレ行ク舟ヲシゾ
オモフ

ト云ヒテゾ泣キケル。

此レハ篁ガ返リテ語ルヲ聞キテ、語リ伝ヘタルトヤ。（今昔物語　小野篁、隠岐の國に流されし時、和歌を読める語　第四十五）

周知のように、小野篁は平安初期の人である。承和元年（八三四）、遣唐副使に任ぜられるが、承和五年（八三八）に正使藤原常嗣とのいさかいから、病気と称して職務を拒否したうえ朝廷を批判する詩を作したため、嵯峨上皇の怒りをかい隠岐に流されている。今昔物語はその時の話を伝えたものである。ちなみに彼は一年半後に許されて帰京し、その後は従三位参議に至っている。

今昔物語集そのものは平安末期の成立であると考えられているが、その中に収載されている説話はかなり古いものものある。ただ説話であるのでそのままで史実とは出来ないが、この小野篁の説話は、少なくとも平安中期以前に語られていたものとして誤りはないであろう。そうすると「明石」の歌は小野篁の歌であるとされていた時期があることが認められ、その後、作者が人麻呂であるという説が生まれ、そして人麻呂の代表作になっていったという過程を確認することが出来る。また今昔物語の成立は、この人麻呂影供が行われた元永の直後の成立と考えられているので、一方では今昔物語の小野篁の歌であるという説話があり、一方では人麻呂の代表作として顕彰されるという状況をみることが出来るが、人麻呂影供においては、この「明石」の歌は人麻呂の代表作として誰一人疑うものはいなかったかに見える。これは時代的な変遷というよりも、和歌と説話という担い手とそれぞれに対する観念を考慮して考えなければならないであろう。説話は貴族も含めた民間のうわさ話として存在しており、一方で和歌は貴族の教養として極めて重要な位置を占めていたと考えられるからである。言い換えれば和歌の担い手においては「明石」の歌は人麻呂の代表作として極めて尊重された位置にあったと指摘出来る。

それでは何故、説話における作者の異同はあまり考慮されず、和歌世界において人麻呂歌の代表という評価になっていったのか、次にその理由を探ってみる。

この「明石」の歌は、平安朝以降の歌集や歌学書に多く納められている。書名、成立年代（推定も含む）、編纂者、該当歌国歌大観番号、歌作者の明記有無を順次掲げる。

書名	成立年代	編著者	国歌大観番号	作者表記
古今集	九〇五（編纂の勅）		序文古註　四〇九	或人云人麻呂
古今和歌六帖	九八〇			
人丸集	一〇〇四		一八一八	人まろ
前十五番歌合	一〇〇八	藤原公任	二一七	
深窓秘抄	一〇〇八	藤原公任	二九	
金玉和歌集	一〇〇九	藤原公任	七五	
和漢朗詠集	一〇一二	藤原公任	四七	
九品和歌	一〇一二	藤原公任	六四七	ひとまろ
三十六人集	一〇八六		二	人丸
古来風体抄	一〇八七	藤原俊成	六	
俊頼髄脳	一一一一		二六九	
古今著聞集	二六四成立	二一八の記事	九九人麻呂影供の事（上記）	人麿
今昔物語集	二二〇成立	二八（上記説話）		

以上、古今著聞集所収の人麻呂影供の時代までに成立したと考えられている歌集や歌論書に「ほのぼのと」の歌が収載されているものを掲げた。ここで顕著な特徴として見られるのは、藤原公任の著作物である。その中でも『前十五番歌合』『深窓秘抄』『金玉和歌集』ではいずれも「人まろ」または「人丸」と作者名を明記しており、その以前に成立した『古今和歌六帖』が「人まろ」とし、また『人丸集』に入集しているのと同様の作者名を記している。その上『和漢朗詠集』では、

ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆくふねをしぞおもふ〈人丸〉（六四七）

わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつりぶね〈野〉（六四八）

となっており、今昔物語説話の小野篁である「野」と作者名が入って「人丸」歌と連続して掲げられている。このことはこれより後の成立である藤原俊成の『古来風体抄』にも

小野篁

渡之原やそ島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよあまの釣舟（二六八）

柿本朝臣人麿

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ（二六九）

と作者名付きで記載されており、順序が逆であるが同様の形で示されている。『古来風体抄』編纂の直後に『古今著聞集』所出の「人麻呂影供の事」になる。

これらの歌集における両歌の作者のあり方は、小野篁とする今昔物語説話を退け、人麻呂の歌としてとらえていることを示している。

さて、同じ公任の歌論書である『九品和歌』では一番先頭で「上品上」とされ非常に高い評価がされている。

上品上　これはことばたへにしてあまりの心さへあるなり

春立つといふばかりにやみ吉野の山もかすみてけさはみゆらん（一）

ほのぼのと明石のうらのあさ霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ（二）

これは仏教の阿弥陀仏の手印にちなんで［上中下］品［上中下］の九段階に分けて和歌を評価したもので、その中の上品上は一番上になる。

藤原公任は、当代の学者として高く評価されており、大鏡収載の藤原兼家の逸話でも有名な人物である。この藤原公任が「明石」の歌を人麻呂歌として高く評価しているということは、その後の人々に強い影響力を持ったであろうことは言うまでもなく、その結果、人麻呂の代表作として定着していったと考えることが出来る。

これより時代が下がった頓阿が為世の歌学説を聞書した書とされる『井蛙抄』にも

わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつりぶね（九九）

ほのぼのとあかしのうらのあさ霧にしまがくれ行く舟をしぞおもふ（一〇〇）

と順番にでており、その影響の程度が伺われる。

人麻呂が明石と関係を持つのは、万葉集の「柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首（巻三・二四九～二五六）」があり、後の天平八年遣新羅使の一向が明石通過の際に歌っている（「當所誦詠古歌」巻一五・三六〇六～九）ことからも、どの時代まで口承で伝わったかは不明であるが、都人にとってもよく知られており、明石と人麻呂とのつながりはこの歌群が原因となっていよう。そうした状況から平安初期に明石でのこの歌が人麻呂に仮託されていったと考えて誤りはいであろう。

ちなみに、これ以降に現れている歌集を列挙すると以下のようになる。上記リストと同様、書名、成立年代（推定も含む）編纂者、歌番号、作者表記の順番で表で示す。

書名	成立年代	編著者	国歌大観番号	作者表記
奥儀抄	一一三五	清原元輔	八八	
袖中抄	一一八二	顕昭	五二一	
万葉集時代難事	一一八三	顕昭	三三	柿本人麿
柿本人麻呂勘文	一一八四	顕昭	四四	
無名抄	一二一一	鴨長明	四六	
西行上人談抄	一二二八		三九	人丸
詠歌一体	一二六二	藤原為家	四二	
竹園抄	二八五	藤原為顕	一六	
三五記	一三二三		七九、二二二	人麿
井蛙抄	一三六二		一〇〇	

このように通覧すると、平安末期以降においても歌学書などに「明石」の歌は人麻呂の代表作として掲載され、時代が下がるほど信じて疑わない状況になっていったことが知られる。

四　まとめ

平安時代の和歌文学は、奈良時代終わりから平安時代初期にわたる国風暗黒時代を経て、復興したという経過を持っている。この国風暗黒といわれる時期に和歌史の上では大きな変化があったと言わ

ざるを得ない。万葉集終焉以後、和歌そのものは古今集の勅撰頃まで宮廷を離れて細々と残ったものの、万葉集と六歌仙の歌では歌風がまったく異なる。そうした原因はまだ解明されていないが、そうした中に、人麻呂に対する評価やイメージも含まれている。平安朝においては、人麻呂像は再構築されたと言える。しかも万葉集の歌の再構築ではなく、歌そのものも万葉集収載歌と全く別の異質なものであり、藤原京時代における人麻呂の実態とはかなり相違したものである。

しかしそうした解釈は、近世の国学における万葉集の解釈まで長く続いていて、人麻呂信仰などの様々な周辺部に影響をもたらしている。現在の万葉集研究は、個々の歌作品の成立時の姿への探索が中心となっており、平安朝以降は研究史的位置づけの中でとらえられているが、今後はそうした受容の理由を究明して、平安朝以降の文化への影響といった観点からとらえ直す必要もあると言えよう。